

海老澤 知世（えびさわ ともよ）

こども家庭庁長官官房参事官（総合政策担当）政策評価・統計担当係長（令和5年6月現在）

【派遣データ】

派遣元省庁：総務省

派遣先機関：国際連合統計部（UNSD）

派遣先での役職：フェロー（Fellow）

派遣期間：2019年8月～2020年7月

派遣時の最終学位：学術修士（Master of Art）

【略歴】

2014年（平成26年）4月、総務省入省。総務省政策統括官（統計基準担当※当時）国際研修協力官室、国際統計管理官室を経て、国連統計部にフェローとして派遣。国連統計部では、社会・ジェンダー統計係に所属し、国連版男女共同参画白書の執筆、ジェンダー統計に関する国際専門家グループの事務局業務などを担当。帰任後に総務省統計局総務課を経て、2023年4月よりこども家庭庁へ出向。

○ 国連統計部に派遣されることになった経緯について、教えてください。

就職直前に趣味で始めた英会話が楽しく、国際的な仕事に憧れるようになった私ですが、希望が叶って2016年より政策統括官（統計基準担当）で国際統計に関する業務に従事することになりました。

政策統括官室ではちょうど翌2017年に、カウンターパートである国連統計部へのフェロー派遣制度が新設され、強く興味を持つようになりました。さらにタイミングの良いことに2017年及び2018年は特定のセクションしか派遣先に選ぶことができませんでしたが、2019年からは候補者の経歴・キャリアを踏まえて、派遣先を選出する機会が与えられることになりました。

このような流れにおいて、大学での専攻内容を生かすことができ、またこれまでの政策統括官室での業務の中で既に人脈を築いていた国連統計部社会・ジェンダー統計セクションの一員となれる絶好の機会と思い、派遣募集に応募することを決めました。

○ 選考プロセスについて、教えてください。

履歴書（CV）と、これまでの自分の経験を生かしてフェローとしてどのように国連で経験を積み、帰国後はどのように得た知見を活かして日本での業務に貢献していきたいか、というテーマでの英語小論文の作成が求められました。書類選考を通過すると、日本政府（総務省政策統括官室）職員と国連職員のそれぞれと10～15分程度の面接を行いました。

フェローは研修生という立場に近いということもあり、厳しい試験があるわけではありません。

しかし、派遣先では知見を活かして国連統計部の業務に貢献することが求められるため、派遣前までに統計や、統計に関する国際業務に関する知識や経験を積んでいることが重要です。英語力についても、日常会話に加え、統計の専門用語がスムーズに理解できることが求められるため、国際統計管理官室において、統計分野での国際業務に従事していた経験は大いに役立ちました。

英語小論文や面接では、自分の積んできたキャリアが国連統計部の、特に自分が希望する社会・ジェンダー統計セクションでの業務にどのように生かせるかを最大限アピールすることに終始努め、無事に合格をいただき、希望のセクションへの派遣が決定されました。

○ 英語の勉強について

語学には高い関心を持っている私ですが、英会話を始めたのは非常に遅く、総務省に内定をもらい、学生最後の時間を使って英会話を始めたいと思ったのがきっかけでした。英会話教室に通い、卒業旅行代わりにイギリスの語学学校へ1か月だけ通うなどしているうちに、入省してからも国際業務に従事したいと強く願うようになっていました。

特に2016年～2019年7月まで在席した国際統計管理官室では、日々の業務を通じて読む、聞く、書く、話すという全方面の英会話スキルを磨くことができ、また統計の専門用語も学ぶことができたため、英会話教室を辞めた後もTOEICの点数は継続して伸びていました。統計の専門用語は、最初は何を言っているのか分からない、次に難しい単語が分かっていても独特の言い回しや文脈、これまでの国際的な議論が分からないなど、様々な壁がありました。しかし、たくさんの会議文書を読み、その壁を乗り越えていくうちに、フェロー派遣につながるスキルが身に付いていきました。

○ 着任に当たり苦勞した点について、教えてください。

当時フェロー派遣制度はまだ開始されて日が浅く、国連側もどのようにフェローを扱うか試行錯誤している状態でした。そのような中で最も苦勞したのは、どのように自分の仕事を作るかという点でした。職場文化が異なる国連では、待っていても仕事が振ってくることはなく、上司に対してや会議の場で、自分にできることを積極的に発信し、仕事を獲得していく必要がありました。最初は言語と文化の壁があり、なかなか自信をもって発言することが難しかったですが、郷に入っては郷に従えということで、周囲の国連職員の言動を真似ながら、徐々に自分で仕事を作り出していけるようになりました。

衣食住について、ニューヨークという多国籍な街では特に日本と変わらない生活を送ることができます。海外生活経験がなかった私ですが、先輩が残してくれた生活マニュアルを参考にして、先輩が利用した日本人が経営するシェアハウス仲介会社を用いて住居を探しました。物件を全く見ないで、渡航する前にウェブサイトの情報のみで契約しました。見知らぬ人とのシェアハウス生活は不安もありましたが、それ以前のニューヨーク出張に際して先輩の住む物件を見せてもらい、またその周辺がアジア人に住みやすい環境であることも事前に確認できたことから、同じ地域の似た物件に決めることにしました。仲介会社のサポートも日本語で滞りなく受けることができ、住居をはじめとする生活環境はスムーズに整えることができました。

一方、フェロー派遣は基本的に若手職員を想定しているため予算が厳しく、物価が高いニューヨークでは上手に予算内でやり繰りすることが重要で、食事は自炊、昼は弁当を持参するなどして工夫していました。この点でもアジア人食料品店が多い地域を選んだことが功を奏しており、日々自炊するメニューも日本と全く変わらない内容で作ることができ、環境変化によるストレスの軽減につながったと感じます。

○ **国連統計部の仕事の特徴や、担当した業務の内容について、教えてください。**

私の所属先である社会・ジェンダー統計セクションには、課長以下4名の職員が所属していました。同セクションが事務局を務める国連専門家会合の開催運営や、生活時間統計（日本では社会生活基本調査）の国連統計マニュアル案策定に向けた執筆補助等の業務を担当しました。またタイミングよく、国連が5年ごとに刊行する世界版男女共同参画白書ともいうべき「World's Women」の2020年版の執筆に向けたプロジェクトが走っていたため、その執筆作業にも関与することができました。

フェローに期待される役割は、一つにはもちろん国連の業務に純粋に貢献することですが、もう一つには、国連と日本（総務省や他の関連機関）との間の架け橋になるというものがああります。私は自分の仕事を作り出す中で特に後者を意識し、国連専門家会合では議長を務める日本の会議参加や国連とのコミュニケーションをサポートし、また所属セクション以外の業務でも、国連統計部と日本との間の調整を積極的に担っていました。

またニューヨークからの外国出張もあり、私の場合は生活時間統計の技術支援でモロッコ統計局を訪問しました。

○ **派遣を通じて得たことや、派遣経験を今後どのように活かしていきたいかについて、教えてください。**

多種多様な人種・文化が交差する国連という職場は、まさに多文化共生社会でした。考え方や捉え方も人それぞれの環境においては、常に自分の考えをしっかりと持ち、それを適切に発信するという姿勢で臨むことが重要でした。派遣期間中に身に付いたこの姿勢は、帰国後に日本で働く中でも非常に有効に働きました。この経験は、誰かに言われるままに仕事をするのではなく、自ら考えて行動し、積極的に多方面から情報収集し、困難な状況を打開していくエネルギー源や自信となって、その後の仕事全般に生かすことができています。

またネットワーク（人脈構築）の重要性も、派遣を通じて痛感したことの一つです。国連での仕事は「ジョブ型雇用」で、それぞれ専門性の高い職員が主体的に業務に取り組んでいます。逆に、それぞれが担当分野を抱え込んでいる側面もあり、自分から積極的に人脈を構築して、情報をスムーズに入手できる下地を整えることが、業務を行う上で非常に重要でした。この経験も、日本において、省内外や他の機関など、様々な方面へ積極的に人脈を広げて円滑に業務を行うというスキルが身に付く基礎となりました。

○ **将来的に国際機関への派遣を希望する職員へのメッセージをお願いします。**

国連で働くと言うと、敷居が高い、自分の能力でやっていけるのだろうか、英語は通じるのだろうか等の様々な不安が頭をよぎるかと思います。しかし、フェロー派遣は国連の正規職員とは少し異なり、研修生に近い立場のため、若手が非常に挑戦しやすい制度になっています。事前に統計に関する業務経験を積んでおくことは必須であり、可能であれば統計に関する国際会議に参加する等の経験をしておくに越したことはありませんが、最低限必須とされている経験・業務年数等の基準を満たしていれば、あとはあまり悩まずに思い切って挑戦することが可能です。英語力なども心配かと思いますが、国連は様々な国籍・バックグラウンドを持った職員の集まりなので、語学力というより、「この人を理解しよう・自分の意見

を伝えよう」という意思、すなわちコミュニケーション能力の方がずっと重要です。「当たって砕けろの精神」で、様々な業務・経験にぜひ挑戦していただきたいです。その経験を通じて、統計に関する業務のみならず、コミュニケーション能力、人脈構築力など、その後のキャリア全般に活用できる底力を身に付けることができると考えています。また、仕事のみならず、私生活においても、休日には広いアメリカの様々な場所を旅するなどして、見聞を広める絶好の機会となっています。

ぜひ、多くの人にこの制度を活用していただき、国際社会でご活躍いただきたいと思っています。